

『文化史よりみた東洲齋写楽——なぜ寛政六年に登場したのか』

著者 岡林みどり 発行；東京・清水書院 定価；2530円（税込み）

浮世絵師・東洲齋写楽の名前は歌麿や北斎とならんで有名だが、かれの出自についてはほとんど何もわかっていない。かれの残した大判浮世絵二八枚は寛政六年五月に江戸歌舞伎三座の上演興行に取材したもののだが、役者の顔をアップにして役者の個性をいかに表現した図像は現代のわれわれにも十分に迫ってくる力をもっている。

しかし明治時代にはほとんど忘れられていた。むしろヨーロッパでの評価が高く、1910年にはドイツの心理学者ユリウス・クルトがその伝記「写楽」をあらわし、歌麿、北斎とならぶ絵師と評価した。ところがクルトの引用した齋藤月岑の「増補浮世絵類考」にはその出自を「阿波藩能楽者・齋藤十郎兵衛」とあったので、その出自についてはそれが定説となっている。

だが、このような人物名の同定では、版元・蔦屋重三郎が、身代半減のきびしい幕府のお仕置きのおとで、なぜ閏年の寛政六年五月から翌年の正月までの十ヶ月間に一挙に全145枚の錦絵を開版したのかの理由は明らかにならない（謎1）。さらに役者だけでなく相撲の絵もあることの意味もわからない（謎2）。歌麿の使い始めた雲母摺の豪華な仕上がりをなぜ無名絵師に使わせたのか（謎3）。蔦屋の期待の大きかったことはわかるが、十ヶ月で中止したのはなぜか（謎4）。役者についても売れそうもない端役役者まで取り上げたのはなぜか（謎5）。

本書はこれらの謎を寛政六年の世相と上演歌舞伎の舞台内容からよみ解く。

寛政六年八月はじつは有名な杉田玄白の「解体新書」開版二十周年にあたり、八月の演目に平賀源内（戯作者名福内鬼外）の浄瑠璃「神靈矢口渡」がかかる。そして六年は閏年で、これにかけて沢村宗十郎は自分の誹諧名「訥子」にかけて「閏訥子名歌誉」を上演し、伊勢物語や古今和歌集などの古典文芸にかけた舞台をくりひろげた。

浮世絵や歌舞伎の演目には、当世の世相を穿つ内容がもりこまれるのが伝統だが、上の二つだけでなく久しぶりの上覧相撲の実施、歌舞伎役者の追善興行などもあり忙しかった。さらにロシアが漂流者・大黒屋光太夫を送りとどけて開国をもとめた。松平定信公は江戸に屋敷を与えて、閏十一月には太陽暦による「オランダ正月」が実施され、歌舞伎ではキリシタン物が上演された。それらを記録した写楽の絵柄をていねいに見て、その内部連関を取り出すことで、北斎と西村屋与八の関与が見える。

写楽絵の全体は江戸絵と江戸歌舞伎の発展のあとをたどり、江戸絵の祖といわれる岩佐又兵衛をモデルにした浮世又兵衛の出し物や、平賀源内の発展させた黄表紙を支える『古今和歌集』や『伊勢物語』を題材にしている、江戸歌舞伎の発展には万葉集からはじまる古典文芸の素養が欠かせないことを主張している。

目次

口上

一章 追善絵の謎～歴史解題シリーズ

二章 寛政五年の蔦屋重三郎

三章 寛政六年の歌舞伎興行（三座の演目）と錦絵開版の構想

三の一、八月興行の「神霊矢口渡」

三の二、上覧相撲

三の三、正月対面の場

三の四、観世の水紋

四章 東洲齋写楽と写楽の全一四五枚の構成

四の一、構成の要点

第一期；黒雲母摺の大判二十八枚

第二期；白雲母摺の大判と細判黄つぶし、鼠色つぶしの（一部に舞台背景）の登場

第三期；間判大首絵の登場

第四期；桐座、都座の曾我の対面、都座の歌舞伎狂言「五大力恋緘」

四の二、歌舞伎絵一三六枚をよむ前に

四の三、寛政六年の五月から閏十一月までの歌舞伎絵一二二枚をよむ

第一期；五月 都座、桐座、河原崎座の三座

第二期；七月の都座、八月の桐座

第三期；十一月 河原崎座、都座、桐座の二座

閏十一月 都座

四の四、間判大首絵十一枚をよむ

五章、寛政七年の旅立ち～勝川春章の三回忌を終えて、

五の一、蔦重、宣長宅を訪問

五の二、佐野川市松と奥村政信

五の三、岩佐又兵衛の伊勢物語図

五の四、市松の登場した寛保元年とは

六章；その後の東洲齋写楽

六の一、寛政七年の松平定信公

六の二、写楽への追憶

六の三、明治時代になっての評価

六の四、東洲齋写楽とはなに者か

むすび 役者絵から芝居絵へ

あとがき

岡林みどりの既刊書 発行；東京・批評社；定価；3500円（税抜き）

『百人一首の図像学』

——狂歌絵師北齋 最後の仕事——

『狂歌絵師北齋とよむ古事記・万葉集』

——北齋はどのようにして百人一首を27枚に要約したのか——